

<緒言> 現在、スギ花粉症は日本で最も多い花粉症であり、国民の約 15%が悩んでいると推定されている国民病である。花粉症の療法に減感作療法がある。これは患者にアレルゲン（花粉タンパク質）を少量ずつ長期にわたり投与し免疫寛容（特定の抗原に対して免疫反応が起こらなくなる現象）を誘導し治療する方法である。しかし、強いアレルギー反応が生じる可能性があることから、投与量を厳密にコントロールしなければならず、治療には長期間の通院が必要など患者に負担をかける。免疫寛容はアレルゲン中のアミノ酸部分配列である抗原決定基が免疫リンパ球である T 細胞に作用することによって起こる。そこで本研究では、T 細胞によって認識される抗原決定基（T 細胞エピトープ）を設計し、それを含むペプチドを細菌等で作らせ、それを経口ワクチンとして使用することを想定し、そのための遺伝子構築を行った。

本研究では、スギ花粉抗原抗定基を含む *cry j1*、*cry j2* 遺伝子をコレラ毒素の B サブユニット（CTB）遺伝子に結合した *ctb-cry j1-cry j2* 遺伝子の構築を目指した。

<実験方法・結果> *ctb* 遺伝子及び *cry j1* 遺伝子を、それぞれの DNA テンプレートから PCR 法により得て、オーバーラップ PCR 法により *ctb-cry j1* 遺伝子の構築を行った。PCR 及びオーバーラップ PCR 後にアガロースゲル電気泳動で、*ctb* 遺伝子(323bp),*cry j1* 遺伝子(220bp),*ctb-cry j1* 遺伝子(543bp) を確認できた。今後、*ctb-cry j1-cry j2* 遺伝子の完成を目指す。